

『英文帝国憲法義解』について

本学の前身英吉利法律学校が誕生して四年目にあたる
一八八九（明治二十二）年六月二十八日に、英吉利法律
学校から一冊の書籍が発行された。

書名は『Commentaries on the Constitution of The
Empire of Japan』、『英文帝国憲法義解』と称されてい
るその本は、大日本帝国憲法起草の中心人物伊藤博文が
執筆した『帝国憲法義解』を、欧米先進国に紹介するた
め、腹心の伊東巳代治が英訳したものであった。

両書は、政府の公式見解に準じた性格を持ち、それゆ
えに憲法発布後百種以上も刊行された注釈書の中でもひ
とくわ脚光をあびたようであるが、和文原本は国家学会
に、英訳本は英吉利法律学校にそれぞれ版權が与えら
れ、個人の著作として出版されたものであった。この『英
文帝国憲法義解』刊行前後のエピソードを紹介しよう。

『英文帝国憲法義解』が刊行された年の紀元節（二月
十一日）に、アジアで最初の近代憲法といわれる「大日



『英文帝国憲法義解』

印刷工に命じて印刷し、痛恨の誤記事件をひきおこした
ものである。
官報局は、当初から秘密漏洩や誤植などはありません
として伊藤らに反対し、事件発生後も引責を拒否した
ため、伊藤
らは進退伺
を出す事態
にたち至っ
た。そし
て、この時
最後まで伊
藤らと対立
した官報局
の責任者が
高橋健三で
あったので
ある。
ところ
で、初めに
書いたよう

本帝国憲法」が発布され、全国各地で憲法発布を祝賀す
る行事がくりひろげられた。英吉利法律学校生徒も、兄
弟校の東京英語学校の生徒と一緒に隊列を組み、皇居ま
での祝賀行進を行っているが、彼らの先頭には、両校の
校長を兼務していた増島六一郎がバリスターの正装で馬
上から行進を指揮したという。

帰校後、増島は両校生徒に対して、憲法の発布は時期
尚早ではあるが、発布された以上は憲法社会に適應でき
る市民になるために、一層の学問修業を生徒たちに求め
るといった内容の演説を行っている。

一方この時、創立者の一人高橋健三は帝国憲法に関連
した事件の渦中にいた。俗に官報誤記事件といわれるも
ので、官報号外に掲載された帝国憲法の前文中に一字誤
りがあった事件である。通常、官報は官報局で編集、校
正、印刷されるが、この号外だけは、事前に憲法条文の
外部漏洩をおそれた伊藤らの思惑で、内閣書記官が直接

に、伊藤は英吉利法律学校に『英文帝国憲法義解』の版
権を与えている。しかし、面白いことに、『伊藤博文関
係文書』によれば英吉利法律学校側でその交渉にあた
り、編集全般を担当したのが右の高橋健三であったこと
がわかる。実際、同書の初版本の奥付にも「英吉利法律
学校総代高橋健三」とされている。

どうやら官報誤記事件は高橋に対する伊藤の評価を深
めることになったらしい。ともあれ、同書は英吉利法律
学校にとって、英語による法律学習の好材料となったは
ずであり、同年九月の新学期からは帝国憲法の講座も設
置されているのである。

この『英文帝国憲法義解』は八九年六月二十八日の初
版のほかに、一九〇六年六月二十七日に第二版が、三一
（昭和六）年五月二十日に第三版がそれぞれ刊行されて
いる。